

高齢患者医療における悩み

80歳を過ぎた患者さんの家族から電話が入った。1年前に治療した患者さんであった。「近くの医師に往診してもらったところ、全身に浮腫（ふしゅ）が見られるので主治医の先生に診ていただくようにと言われた」という内容であった。

1回の抗癌剤治療で幸いに病巣の大部分が消失し、高齢でもあったので、外来管理、自宅療養中であった。腰は曲がっていたが身の回りの事はすべて自分でされており、病室ではベッドにきちんと正座して、いつも本を読んでいた。治療にも大変積極的で、退院後も定期検診には欠かさず来院していたので、感心する患者さんの一人であった。

家人に付き添われ入院してきた時は、全身に浮腫がみられ、おできができて、外科医で切開してもらったばかりと頭に包帯を巻き、子どものような顔をしていた。食事摂取も困難な状態なので、早速栄養剤の点滴を開始した。

「先生、私はもうダメなんでしょう？」「そんなことないから元気を出して・・・」と答えても、「昔から、浮腫が出てきたら死ぬというじゃありませんか」と、すかさず切り返された時は内心ギクッとした。

腹痛もあり、ほとんど経口的に摂取不可能で栄養剤の点滴は続けられたが、血管から漏れてばかりいるので、中心静脈栄養をしなければならなかった。しかし患者さんの口からは、「早く死にたい、楽になりたい」という言葉がしきりに発せられるようになった。輸液の量を最小限にし、痛みをとるような対症療法が続き、家族や看護婦たちの介護もむなしく、目を閉じられた。

どんなに高齢であっても、患者さんの家族、ことに肉親にとっては一日も長く生きて欲しいと願っていると思う。しかし、病院における老人の入院患者さんの数は、年々増加の傾向にある。時には、円滑な病床利用に困難をきたすことも少なくない。また、年々増え続ける医療費増加の一因とも言われ、高齢者の医療のあり方はどうあるべきなのか、多くの問題を含んでいる。実際に入院している患者さんの中には、自宅で自然死を迎えたいと思われる方も無いわけではない。

しかし、現在の家族構成、住宅事情、経済的負担等を考えるとそれも中々難しい問題である。入院を希望されれば何とか入院させてあげたいと努力をし、1分でも1時間でも長く生きるような延命治療を優先させてしまうのも、無理のないところである。

多くの矛盾を持っていると思いつつも、実際に入院される患者さんに対して、患者さんの意思とは違った治療をしている気がしてならない。